
おやつシリーズ

あさぎ 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おやつシリーズ

【Nコード】

N 4 2 3 1 M

【作者名】

あさぎ 翠

【あらすじ】

お題形式の短編集。一応話は繋がっています。

コナンとキッドの深夜のおやつタイム。

薄荷飴

バタバタと布がはためく音がして気がついた。

目を開けると半月よりは丸い月がやっと上つてきたところだった。都会の暗くて明るい空を背景に白い人影が反射して眩しい。思わず目を細めると、ここにいる本来の目的を思い出した。

今日はあの気障な怪盗の予告日で折角暗号を解いたのだからと戯れに出てきたのだが、どうやら転寝してしまったらしい。そもそも昨夜見つけてしまった本が悪いのだ。タイトルが目に入ったときにトリックの詳細が思い出せなくて暫らく悩み、悩んでいるくらいならと読み出したのが日付の変わる少し前。今日も一日子供たちに付き合っただの鬼ごっこだのと力いっぱい遊んできたのだ。眠くならないほうがおかしい。

ここは最近流行の庭園化されたビルの屋上だった。ベンチがいくつか置いてあり花壇に小路、小さな噴水の装置まである。探偵はその一角にある藤棚の下のベンチに寝転がっていた。

怪盗は対角上に位置する東屋の屋根の上に立ち、ポケットから取り出した見事な大きさの宝石を月に翳している。暫らく眺めていたようだが、顔を俯かせ宝石を一瞬の内に消し去った。

それを見るときもなしに見ていた探偵は、ふと、思いついたことを口にした。

「なんか見えんのか？それ」

「うわあ、びっくりした。居たのかよ、名探偵」

怪盗は心底ビックリしたとおどけながら東屋の上から降りてきた。何の躊躇いもなく探偵の下へとやってくる。

「居ちゃわりーかよ」

「悪かねーけど。・・・具合でも悪いのか？」

「寝てた。どっかの誰かさんがなかなかやって来ないからつい転寝しちまった」

「へえ」。俺のほうは超順調で、予定より早めにココに着いたんだけどな。オメーそれ寝不足なだけだろ。人の所為にすんな」

「うつせーよ。それより、それ。なんか見えんのか？」

「いいや。なんも」

「ふうん」

探偵の思考回路はまだ完全起動していないのか、それ以上の追求はなかった。

「そうだ。これ、返しといってくれるか？」

「ああ、いいぞ」

怪盗はポケットから出した宝石を差し出したが、それに対し探偵は寝転がったまま手を出しただけだった。

「横着だなあ。少しは動けよ」

「メンドクサイ」

「はいはい」

怪盗は仕方なく出された手のひらの上に宝石を乗せた。そして隣のベンチへ腰掛けて背もたれによしかかり、藤の葉の間から空を眺める。たまたま見えた都会の数少ない星が瞬いていた。

「なんか見えたら、壊すのか？」

探偵の不意打ちにギクリとした。探偵を見れば宝石を月に翳し、眠気の残った目で眺めている。その目に挑戦的な光はない。

「なんで、そう思う？」

怪盗はそつとポーカーフェイスを被る。急に態度が変わったと悟られないように。それが目的の一つだと気付かれないように。

「無数の中からたった一つを探してるんだろ？家宝だったら色や形状は分かっているはずだからそんなものではない。そしてお前の場合、私利私欲のためとは考えにくい」

いらない物は返してるしなあ、とやる気のない声が続く。

「そうとも限らないぜ。ある意味、自己満足」

「どろぼーがか？」

「違う！宝石を見つけ出す方！」

「ふうん」

探偵の気のない返事に怪盗は本気で脱力した。先程頑張ったポーカーフェイス分のエネルギーを返して欲しい。

「なあ、名探偵、眠いんだったら送ってやろっか？今日のお前、何かボケてねえ？」

んーそうかあ？と言いながら探偵はもぞもぞと起き上がり、ポケットから宝石を包むためハンカチを取り出す。

「いや、いいや。オメーも食うか？」

再びポケットから出てきた手の中にはやや大きめのキャンディ包み。センスという言葉から遠く離れた包みには、社名も無ければソレが何であるのかも表記されていないし感じ取ることもできない。

「何これ」

「薄荷飴」

「ミントじゃなくて？」

「和種薄荷」

「ジジくさ」

「ならいい」

探偵の機嫌を損ねた。

「わあ、ごめん。いただきます」

恐る恐る開けた包みの中身は薄荷の葉を模した透明なキャンディ。最初に思った通りやや大きくて、探偵を見てみると頬がリスのように膨れていた。くくつと笑うと睨み返されたので大人しく口に含むことにする。じんわりと優しい甘さの中にほんのりとした爽やかさが広がってきた。

「何これ！」

「な、うめーだろ？薄荷にトゲがなくて上品な味なんだ。多少甘いけどこれなら許せる」

「マジでうめえ！」

探偵と怪盗の間に、暫らく穏やかな時間が流れた。何とも言えない心地よい時間の流れが薄荷の風味と共に体に染み渡る。

「んじゃ、帰るな」

そう言っ探偵は軽く勢いをつけてベンチから飛び降りた。

「おお、気をつけて帰れよ。てか、ホントに送んなくて大丈夫か？」
「ダイジョブ、ダイジョブ」

探偵は振り向きもせず手を振って退場した。

怪盗は酔っ払いを見送る気分だったが、それは内緒だ。

薄荷飴（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

ロストシップでの二人のやり取りを見てたらどうにも落ち着かなくなり（笑）、何かを書いてみようと思い至り、とうとう投稿してしまいました。

誤字脱字等ございましたら遠慮なくご指摘ください。

感想もお待ちしております。 100707

100712 部分的に改行を入れ行間を開けました。

チョコレート

今日の俺のショーは非常にスマートだった。

予告時間とともに暗転、宝石をダミーとすり替え、即、逃走。

とてつもなくシンプル イズ ベスト。完璧だ！さすが俺！

今頃中森警部は地団駄を踏んでいることだろう。

怪盗はククツと喉の奥で笑うとむせそうになるのを必死で堪えて
ハングライダーを操作した。

中継地点へと降り立ち、辺りを窺う。だが、まだ探偵は来ていない様だ。

俺はゆつくりとポケットの中のターゲットを取り出した。

そして敵かに月へと翳す。

一番ドキドキする瞬間だ。

決して期待をしてはいけない。期待をすればするほどハズレた時の落胆は大きくなるからだ。だが一方では、それ以上に大きな期待を掛けている事も知っていた。

一瞬の緊張に呼吸すら忘れる。

モノクルの飾りと白いマントがビル風に揺れた。

怪盗は目を閉じ、一度深く深呼吸すると気持ちを切り替えた。

さてヤバくなる前に中森警部に返却しますかと翼を広げようとすると、何時もよりも刺々しい慣れた気配がして勢いよく屋上の扉が開かれた。

ああ、怒ってる怒ってる。

怪盗は悪戯が成功した可笑しさと、その小さな体に似合わぬ怒り

の眼光に、ひとりでに口角が上がっていくのを感じた。

「おいテメー。なんなんだよ、あの手抜きは」

手抜きとは心外な。シンプル イズ ベストと言って欲しいな。
探偵は怒りも顕わに足音を立てながらやってきた。急いで来たため、多少息が上がっている。探偵は怪盗から5mほど離れた位置で立ち止まると、小さく息を落とした。

「時間通りに照明が落ち、明かりが戻ったかと思えば宝石は安置されたまま。窓も割れてなければ、扉が開いた形跡もない。警官の人数も変わらない。中森警部は「とうとうワシに恐れをなしたな」って笑い出す始末。宝石がダミーだと気が付いた時の気まずさ、お前に分かるか？」

そりゃあ、お気の毒。で、どうやってダミーだって分かった？

「おめーな、普通あーゆーのは上から見ると下から見ると分らない様な所に目印つけんなよ。俺が居なかったらダミーだって気付くのもう暫らく掛かってたじゃねーか？」

そんなの、たまに現場に出てきてくれた名探偵をからかってやるうかたっていう俺の遊び心に決まってるじゃん。逆に誰も気付かなかったんなら、ダミーとは言え、見た目は相当本物に近いってことだろ。そんな物を作る俺ってすげえ。

「なんで暗闇の中宝石をすり替えて、明るくなる前にコソコソと逃げた？」

つまんねーじゃん？今日のショーについては公開されなかったし。だからたまには警察の皆さんの裏を欠くのも一興かと。。。

「おい！何とか言ったらどうなんだ？怪盗キッド！」

探偵はとうとう痺れを切らし怒鳴りつけた。

怪盗は唇の端を上げ顎を引き、シルクハットの鍔を心持ち下げる。多少違和感はあるが多分気付かれないだろう。何か言ってるやうなふと、探偵の目から怒りの色が消えた。

「なんだ。声、出せねえのか」

「え？」

すっかり驚きの声を上げてしまったが音にはならなかった。その代わりに今まで我慢してきた咳が発作のように込み上げてくる。

「無理すんなよ。ノド、外から見ても分かるくらいすんげえ腫れてんぜ。」

げほっ、げほっ、げほっ、げほっ。げほっ、げほっ、げほっ、げほっ。

ぜえはあぜえはあ・・・、げほっ、げほっ、げほっ、げほっ、げほっ、げほっ。

「って、おい、ホントに大丈夫かよ」

怪盗は立っていることも出来なくなり、床に手を着いて咳き込んだ。探偵が駆け寄り、その小さな手で背中を擦る。

あー、情けねえ……。やっぱりさつさと帰るんだった……。

軽く呼吸困難に陥りながらも、最後の意地とばかりに宝石を取り出し探偵に突き付けた。受け取ったのを確認すると、しっしつと手首で追いつ返す真似をする。探偵は少しムツとした表情をしたが、怪盗が咳き込んでいる間はだまって背中を擦っていた。

なんとか咳を押さえ込むことに成功した怪盗は探偵に片手を上げて礼の代わりとする。そして探偵を正面に胡坐をかいて座り込み、無音で『読めるか』と唇を動かすと、探偵は黙って首肯した。

『俺をつかまえねえの?』

「ばーろー。病人なんざ捕まえる気も起きねーよ」

『じゃあ何しに来たんだよ』

「文句を言いにな」

『あつそ。んじゃ帰るわ』

ハラも減ったし。

「帰るって飛ぶのか?落ちるぞ?」

『余計な世話だよ』

「ちよつと待て」

そう言っただけで怪盗が立ち上がるのを制した探偵は何を探しているのかあちこちのポケットを探っている。あつたあつた、と独り言を言っただけで取り出した物を怪盗の手のひらにのせた。

『……』

「なんだよ」

『どうしたの、これ?』

「貰ったんだよ」

『誰に』

「美術館の職員」

『ちゃんとお礼言ったか？』

「あたりめーだ」

怪盗の手のひらにのせられた物は、一粒の小さな四角いチョコレート。

「ハラ減ったんだろ？非常食だ」

文句言ってるじゃねーよ、親じゃあるまいし。
続けられた探偵のつぶやきに笑いがこみ上げ、ごほっ、と一つ咳をした。

『さんきゅ』

「俺は帰る。いいか、飛ぶなよ。ちゃんと地に足を着けて帰れ！」

探偵はバツの悪そうな顔をしながら声を荒げて背を向けた。
怪盗は探偵の背中を見送って手に残されたチョコレートに視線を落とす。

何かを少し考えた後、包みを取って口の中に放り込んだ。

ゆっくりと溶け出すミルクチョコレート。

とても優しい味がした。

チョコレート（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

快斗はこの話の前後で青子の世話になっています（笑）

こっそりと家を抜け出してお仕事して、帰りにはコンビニ袋を提げて口実作り。

玄関先では頭に角を生やした青子が仁王立ち。

いつか書いてみようかなあ。 100712

100724 一言追加。これでもう少し笑えるかも？

キャラメル

怪盗は予告状通り、中継地点のビルの屋上で翼をたたんだ。

「キッド、お客さんだ」

「はいよ」

怪盗は何処からとも無く聞こえた声に答えてトランプ銃を取り出すと、右斜め前方に向かって二枚発射した。一枚目のカードが男の手から銃を奪い、二枚目のカードがそれを弾く。男が「チッ」と舌打ちした頃には怪盗は眼前に迫ってきており、鳩尾に一発当てられていた。

「まずは一人」

銃を拾い、放る。

適当に放られたかに見えた銃はカラカラとコンクリートを滑り、小さな靴によって止められた。

そして怪盗は周囲の気配を探ると盛大に溜息をついた。

「面倒なので、まとめて掛かってきてください」

気配が一気にざわついた。

「ヤローなめんな!」

古典的な叫び声と共に古典的な格好をしたチンピラが三人襲い掛かる。手にはナイフが握られていた。

「どちらの方が知りませんが、私に関わると危ないですよ？怪我される前にお帰りなさい」

怪盗はナイフを振り回すチンピラたちを右へ左へひよいひよかわしながらやる気なさそうに言った。

ふざけんな！

寝言は寝て言え！

チンピラが発言しているというだけで古典的且つ三流だ。この台詞をもし名探偵が言っていたら、もうちょっと緊張感があって楽しめるのに。

「忠告はしましたよ」

怪盗は男達から少し間合いを取ると、懷から無線機を取り出し警察無線へと周波数を合わせた。コホンと一つ咳払いをする。

「中森警部、キッドを発見しました。場所は。。。ビル屋上です」

『よし、分かった！総員、現場へ急げ！！』

ブツツと無線が切れる音がする。怪盗の口元がニヤリと嗤い、男達を挑発した。

怪盗の纏う空気が変化する。

まず目の前にいる男のナイフを右足で蹴り上げて弾き、方向を変え側頭部を蹴り飛ばした。

「にーい」

そして背後から襲ってきたナイフを左側への体重移動でかわし、右足を軸に左足で回し蹴り。

「さーん」

ヒュツ、と音がし首を僅かに傾ける。怪盗の人差し指と中指の間には投擲されたナイフが挟まっていた。

「甘い」

ナイフを持ち直した怪盗はそのまま投げ返す。ナイフは投げた男の目の脇を通り過ぎて壁に当たりカランと床に転がった。そして一気に間合いを詰めると硬直して動けなくなっている男の首筋へ手刀を叩き込む。

「しーい」

この時、怪盗は強い殺気に振り向いた。サッカーボールが凄惨な形で迫ってくる。あわてて避けると「グエツ」という声が上がリ、往生際悪く隠れていた男にクリティカルヒットしていた。

「ごーお、つておい、危ねえじゃねーか！」

「チツ、外したか」

「当てる気満々か？」

「で、こいつらどうするんだ？」

スルーかよ。

悪戯に失敗した、悪い意味で悪気の無い探偵は、先程放って渡した拳銃を持って現れた。

「さつき中森警部呼んだし、すぐに来るだろ。引き渡すよ」

と言いながら怪盗は襲ってきた男達に催眠スプレーを噴射する。

その際に武器になりそうな物は取り上げておく。そして五人の男達をまとめて縛り上げ、ふう、と一息つき探偵を振り返った。

「おつかれ」

探偵は二・三段程しかない階段に座り込み、口をもぐもぐさせていた。

「少しは手伝えよな」

「俺の客じゃねーし」

「そうかい、そうかい。冷てーなあ」

ほらよ。と、探偵はキャラメルを一粒放った。

怪盗はそれを危なげなく受け取り、さんきゅ、と礼を言う。そしてその包み紙を取るうとしているのだが、思うように取れない。手袋の指先の縫い目が邪魔をするのだ。

「手袋ぐらい外せよ」

「分かってるよ！」

探偵に指摘された事がなんだか悔しくて思わずムキになる。だが、イライラすれば出来るはずの事も上手くはいかない。怪盗は早々に諦めて手袋を外すと包みを取ってキャラメルを口の中に放り込んだ。口の中でコロコロと転がす。

ふと、怪盗の動きが止まり、目が見開かれる。怪訝に思った探偵は身を乗り出し声を掛けようとしたところで怪盗と目が合った。

「この味は！」

「な、なんだよ……」

乗り出した身を元に戻すどころか逆に引き気味になって探偵は次の言葉を待った。

怪盗がツカツカと近寄り探偵の手の中にある箱を取り上げる。

「やっぱりそうだ！人気商品で品薄の『あずきキャラメル』！」

「そ、そうなのか？」

「そうなんだよ。ああ、うめえ」

俺いつつもタイミング悪くてさあ、ここ最近味わってなかったんだよね。

怪盗はとても幸せそうだ。箱に頬ずりしそうな勢いである。

「そんなに好きならやるよ、箱ごと」

「えっ！いいの？！」

「いい、いい。俺は一個で十分満足したから」

「やったあ！ラッキー！」

おい、キッド。幾らなんでもキャラ崩れ過ぎじゃねえか？ファンが見たら泣くぞ、あと中森警部も。ポーカーフェイスの“ポ”の字も見あたらねえじゃねえか。

「それにしても遅いなあ、中森警部」

何処までダミーの風船追っかけてってんだ？

二個目のキャラメルを口に放り込みながら怪盗は呟いた。

「いや、むしろ待つてる必要ってあったか？お前がカード一枚残していけば済むんじゃないの？」

「それもそっか。よし、帰ろう」

怪盗はいつの間にか取り出したカードとペンでサラサラと用件を書き男達に貼り付けた。

これでよし。

ビルの端へと向かっている怪盗に探偵が文句を垂れた。

「おいキッド。これ、二重敬語だぞ」

「細かいねえ。名探偵」

「だって、気持ち悪いだろ」

「一般の企業さんとかでは分かっているてもそう書く事が多いんだよ。古くからの日本の体質ってか性質？そんなとこ。まあ、本当に知らずに書いてる人も多いけど」

「公務員だぞ」

「尚更じゃない？」

「お前いくつだよ」

「聞くなよ、そんな事」

ドサクサに紛れて個人情報を読み出そうとしたってそうは問屋が卸さねえぜ？名探偵。

怪盗はやや勝ち誇った笑みを浮かべて空へ飛び立った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

親愛なる中森警部様

先ほど、私の出待ちをして下さった方々を確保いたしました。
大変危険ですので、二度とこんな事をしないようにお灸を据え

て置いて下さい。

ず。
P・S 宝石は警部のご自宅に返却しておきますので悪しから

怪盗キッド

.....
.....

キャラメル（後書き）

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございます。

すっかり連続投稿です。（汗

子どもが風邪引いて仕事休んだので。。

次回からはこんなに早いアップはないと思います。

ニセアクション物です。

難しいです。敵の三流具合を表現するのが。

ご感想等ありましたら、よろしく願いします。 100713

キャンディ

学校の帰り道。いつもの通学路。少年探偵団たちは今日も仲良く下校する。一人二人と家路へと別れ、最後に哀と探偵の二人だけになったところで探偵はポケットから白い封筒を取り出しカードを広げた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

招待状

本日22時より。にてマジックショーを行います。
お友達をお誘い合わせの上、ご来場ください。

怪盗キッド

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「なあ灰原。これ、どう思う？」

探偵はカードをもう一度読み返してから哀に渡した。いつの間にかランドセルの中に入れられていた封筒。学校で見つけた時は非常に慌てたが、何とか元太たちに見つからずに済んだ。こんなもの見つかったら、絶対に怪盗を捕まえに行くと言っに決まってる。そうじゃなくても時間が時間だ。絶対に連れて行けない。

「どうって、招待状なんじゃない？」

「・・・・・・」

「少なくとも犯行予告には見えないわ。あなたの大好物な暗号でもなさそうだし」

「だよなあ」

探偵は顎に手を当てて暫し考えた。お友達、しかも午後10時に出かけられそうなヤツ。蘭はキッドと聞いただけでダメそうだ。ついでに園子も着いて来そうだし。何より園子は別な意味でダメだ。そもそも俺がこの時間に抜け出すためには阿笠博士の協力が必要となるわけ。

「明日も平日なんだけどなあ。灰原、一緒に行くか？」

「あら、面白そうね」

「今日って6月21日だったよな。うーん。6月21日・・・と言えば確か・・・」

* * * *

「それではこれで最後になります。お嬢さん、私がカードを上から落としていくのでストップと言って下さい」

怪盗の右手から左手へカードが落ちていく。パラパラパラと

一定のリズムで連続して落ちていくカードに淀みはない。ストップ、と囁く様な声に怪盗は笑みを浮かべて左手にある一番上のカードを捲った。

「クラブの4。じゃ、次は名探偵ね」

クラブの4は元に戻され再びカードが流れ落ちる。探偵に選ばれたカードはスペードのキングだった。そのカードも元の位置に戻る。

「ではお嬢さんと名探偵に選ばれたカードを一番上に呼び出してみせましょう」

ワン、ツー、スリー、というカウントの後に怪盗が指を鳴らす。

捲られた2枚のカードは宣言通り哀のクラブの4と探偵のスペードのキングだった。

「本日は私の為に時間を割いて頂き、誠にありがとうございました」

公演終了の挨拶に二人は惜しめない拍手を送った。

「どうだった？楽しんでもらえた？」

「ええ、とっても」

「ああ。お前、やっぱスゲーな」

「ねえ、怪盗さん」

「はい。なんでしょう」

哀は悪戯を思いついたような目で口元をニヤリとさせる。

「おめでと」

「え・・・つと、何が、ですか？」
「あなたがお目出度いから『おめでとう』と言ったのよ」
「は？」

混乱した怪盗と哀とのやり取りに思わず噴出した探偵は、哀の案に乗る事にした。

「確かに目出度いな。おめでとう」
「なんで？」
「いろんな意味だよ」
「そうそう、いろんな意味でだ」

最初はクスクスと笑っていた探偵だったが、とうとう腹を抱えて笑い出した。さすがの怪盗もこの態度には機嫌を損ねたらしく、唇を突き出してムスツとする。

「あら、あなたでもそんな顔するのね」
「だってバカにしてる気がする。特にあの人」
「まあまあ、そんなにいじけんなよ。これやるからさ」

探偵は怪盗に帽子取るよう命じた。そして取られた帽子を逆さに持つよう指示する。すると探偵はポケットの中から両手いっぱいのお饴を取り出してシルクハットの中に入れた。哀もそれにならう。

「あの・・・。コレは何でしょう・・・」
「おひねり」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何だよ！小学生から金取んのか？」
「じゃなくて招待状出しただろ。招待だよ、招いたの。金なんか取らねーよ！っていつか都合のいいときだけ小学生って言うな！」

そして哀には、

「お心付け、ありがとうございます」

きちんと礼を尽くした。

「いいえ、どういたしまして」

「おっと、もう一個あった」

探偵は素早く最後の一つをシルクハットの中に入れると、逃げるようにして出口へと向かって行く。

「帰ろうぜ灰原。キッド、今日は面白かったぜ。ありがとな！」

「本当に楽しかったわ。ありがとうございます」

探偵と哀の言葉に怪盗は自然と笑みが浮かんだ。本当は、招待したはいいが来なかったらどうしよう、と思っていたのだ。コソ泥のマジックショーなんぞ見たくもねえとか、何を企んでやがるとか言われるかもしれないと。終わりよければ全て良し！今日は本当にいい一日だった。

気をつけて帰れよー 明日寝坊して遅刻すんなよー

背後から聞こえてくる怪盗の声に探偵と哀はクスクスと笑いながら足を進めた。

「彼、本当に面白いわね」

「だろ？自分の誕生日に探偵呼んで、自分で持て成すんだぜ？お目出度いにも程があるってもんだ」

「分かってくれたかしら」

「さあな。いいんじゃないねえ？気持ちだけ送つとけば」

「そうね。気持ちだけね」

怪盗はシルクハットの中身を検分していた。とりあえず盗聴器や発信機のようなものは入っていないようだ。探偵を信用していない訳ではないが、何せあの探偵である。見くびったら最後、どうなるか分かったものじゃない。よく見るとキャンディの味が全部違っている。いちご・オレンジ・ぶどう・グレープフルーツ・レモン・ブルーベリー・もも・りんご・マンゴー・ミルク・コーヒーマン・イチゴミルク・ニッキ・梅・塩飴・醤油飴・薄荷飴。最後のほうはちょっと年寄り臭い……。じゃなくて！

「偶然……。だよな？」

怪盗はもう一度、飴の数を数えなおした。

キャンディ（後書き）

大変今更で申し訳ありません。

怪盗のハピバ話です。

このネタ考えてたのが怪盗の誕生日前だったんです。

だんだん文章の書き方がおかしくなってきた感じがします。

変な文章・誤字脱字などありましたらお知らせください。

最後まで読んで下さってありがとうございます。 100721

ラスク

「コナン！」

名探偵！

「ご主人！子どもを人質にとるような真似は！」

「うるさい！これで怪盗キッドも手が出せないはずだ。この石は私の物だ。決して誰にも渡さん！」

ああ、なんて事だ！この俺、怪盗キッドですら恐れる、歩く凶器こと名探偵を人質にするなんて！！常軌を逸脱しているとしか考えられない！

いいか名探偵。俺が動くまで、おっさんに手え出すなよ。いつも通り殺人シユートとか必殺の蹴りとか喰らわしたら、おっさんは間違いなく病院送りだからな！

怪盗はここが室内で、探偵が靴を履いていないことを忘れていくくらいには動揺していた。

* * * *

「怪盗キッドから予告状が届いた。警察はあてにならないから宝石を守ってくれ」と依頼人がやって来たのは予告当日だった。予告状の暗号は警察で既に解かれており、予告時間は21時30分との事だ。蘭は園子の家でパジャマパーティがあるとかで既に出かけて

おり今日は帰らない。小五郎は渋々といった体で「連れて行つてやる」と小さな探偵に言ったが、蘭が居ようが居まいが着いて行くことには変わらない。依頼人も新聞で小さな探偵を見知っていたのか同行に異存はなかった。

依頼人の自宅は、都内のいわゆる高級住宅街の一角にある純和風の大きな屋敷だった。時代錯誤のような大きな木の門に石畳、周囲は築地塀で取り囲まれている。庭には大きな池があり、石橋が渡され、もちろん鯉も放されていた。宝石は、普段は依頼人の部屋である和室の床の間の奥へ仕舞われているが、今日は怪盗に狙われている事もあり、警備の点から人の目に触れるように置かれていた。その部屋は庭に面した南側にあり、縁側の雨戸も閉められておらず、障子を開けば絵に描いたような月見が出来そうだった。

21時を過ぎた頃だろうか。依頼人の様子に、だんだん落ち着きがなくなってきた。そわそわと歩き回り、目に付いた警官達を睨みつけ爪を噛む。時々小五郎をチラリと見ては目線を逸らせ、小さな探偵をじつと見る。その目は小さな探偵を映している筈なのに、別のものを見ているかのようだ。やがて依頼人は徐に小さな探偵の手を取り宝石が置いてある床の間へと足を運んだ。蓋を開かれた桐の箱に置かれている宝石を大事そうに懷に仕舞う。そして小さな探偵は、呆氣に取られている間に抱え込まれてナイフを突きつけられていた。

「コナン！」

小五郎が叫ぶ。

「ご主人！子どもを人質にとるような真似は！」

「うるさい！これで怪盗キッドも手が出せないはずだ。この石は私

の物だ。決して誰にも渡さん！」

中森警部は宝石の持ち主の行動に意見しようとしたが、主は常軌を逸しており、話に耳を傾けようとはしない。

あれ……。小さな探偵は一瞬で変わってしまった立場と自分のドジっぷりに呆れた。ねえご主人、ナイフを持つ手が震えてて危ないんだけど、主に俺が。とは思っても言っではいけない。さて、どうしたものか。自分で何とかするのが先か、予告時間が来るのが先か。卵が先か、鶏が先か。中森警部以下、警察の面々は下手に動くことも出来ず、じっと機会を窺いつつ説得を試みていた。それは小五郎と同じ事だ。やはり自分でやるしかないか、と時計型麻酔銃の蓋を開ける。本当は公衆の面前で使いたくはない。これがどんな物か周囲に知れたら、今後小五郎を眠らせる事が難しくなる。小さな探偵は発射口を主人の腕に当てて周りを窺うと、一人の警官が唇を動かしている事に気が付いた。

『3』

探偵は麻酔銃の使用を取りやめ、腕を下ろした。

『2』

右手で隠すようにして照準スクリーンを閉じる。

『1』

口元に僅かな笑みを浮かべ、探偵は瞳を閉じた。

コロコロと小さな筒状の物が転がり出て、周囲の者たちが「なんだ？」と思ったときには真っ白い光が広がっていた。突然の光に目を焼かれる。直後にブレーカーが落ちた。そして真の闇が訪れる。

二人を除いて。

怪盗が主人のナイフを持った手を掴むと、そのまま捻り上げてナイフを取り上げる。驚いた主人は小さな探偵を取り落とした。そして怪盗は素早くターゲットを盗み出すと耳元で意地悪く囁いた。

「宝石は確かに頂きました」

「な、なんだと！」

「どうした！何が起きた！」

障子越しの薄明かりの中、未だ視力が戻らない中森は迂闊に動くことが出来ない。

障子が開く音がする。

中森は自分の状況に苛立ち足元を踏み鳴らした。

「キッドは外へ逃げたぞ！動けるようになった者から追いかける！」

「！」

「はい！」

警官たちは見えようが見えまいがお構いなしにワラワラと外へ向かった。そこへ中森と小五郎も続く。電力が戻った頃には一人の警官と小さな探偵、そして頂垂れた宝石の持ち主しか居なかった。

「ねえ、おまわりさん」

「なんだい？」

「僕をおうちに送ってくれる？」

「ああ、もちろん」

探偵が持参したボティバッグを背負って片手を上げると警官がそ

れを取り、手を繋いで仲良く屋敷を後にした。

豊穰の月が南中に差し掛かろうとしている。街灯が無くても十分に明るかった。そんな中を二人はてくてく歩く。小さな小学生と警察官。住宅街が途切れ少し大きな道を渡ると、正面は鬱蒼と木が生い茂る大きな公園。その敷地沿いに少し歩いて入り口から中に入る。更に計画的に作られた小道を進み、少し隠れた場所にあるベンチを見つけると、どちらからとも無く繋いでいた手を離れた。

「いつまでそんな格好してるんだ？」

「だって、家まで送んなきゃいけないんだろ？」

「別にいいぞ？一人で帰れるし。それになんかしっくりこねえ」

「補導されても知らねーぞ？」

交通機関使わなきゃ帰れねえだろーが。

警察官はそう言って一瞬のうちに怪盗へと姿を転じた。

「おお！凄え！」

「あのなあ・・・」

何を今更、と突っ込みたくなったが、パチパチと両手を叩いて素直な賛辞を送られれば、気分は満更でもない。怪盗はマジックの一つでも披露してやりたくなった。

「そつだよ。マジックと言えば・・・。あーあ、折角名探偵が来るからと思って、張り切って色々仕掛けといたのに。あのおっさんの

所為で！」

「お前の思考の経緯は知らねえが、今すぐ撤収して来い」

「やだ」

「は？」

「やだ。疲れた。腹減った。名探偵、今日は何か持ってたねーの？」

探偵は一瞬我が耳を疑った。誰だ、この駄々っ子は。しかも、かかるか？

「いや、お前さ。なんつーか、もうちょつと繕えよ。探偵と居て緊張感とかねーの？」

「うーん、今更繕うたってなあ。……多分ムリ」

「……俺、バカにされてる？」

「いんや、ある意味信用してるぜ。だからさ」

「なんだよ」

「なんか食いもん、持ってたねえ？」

探偵は盛大に溜息をついた。そして背負っていたボディーバッグを降ろしベンチに腰掛け、中から大きなビニール袋を取り出す。入れ物は味も素っ気も無いが、中身は砂糖がかかったフランスパン。

「おお！ラスクなんて豪勢じゃん。もしかして手作り？」

「そうだ。蘭が急に作ってみたくなつたとか言つて、フランスパンを何本も買ってきてよ。これが俺の消費担当分。お前、手伝え」

「喜んで！！」

「その前に、宝石出せ」

怪盗はお預けを喰らった。

「そんなの後でもいいじゃん。つーか、俺が適当に返しておくし」

「ダメだ。お前が事務所に返した事にして依頼料をふんだくる」

「生活掛かってるねえ」

「俺にナイフを向けたんだ。それぐらいは当然だろ」

「おお、コワッ。んじゃ、蘭ちゃんへのお礼も兼ねてカードも付けようか？」

「それいいな。頼む」

おっけー。怪盗は軽快に返事をして宝石を月明かりに翳す。一瞬曇った表情に探偵は気付いただろうが何も言わなかった。そして誤魔化し半分に声に出してカードを作成する。毛利探偵へ、名探偵の目が光っていると私も仕事が遣り辛い。宝石は貴方から依頼主へご返却ください。怪盗キッド。

「なんだ、その文面は」

「いいだろ。箔がつくぜ？」

怪盗はニッシッシと笑った。そして探偵にカードと宝石を渡すと、探偵の隣に座り目をキラキラさせて行儀よく手を膝の上に揃える。探偵は大切な物質、^{ものしち}もとい、宝石をバッグに仕舞いつつ頭痛を感じていた。ああ、尻尾が見える気がする。バタバタと勢いよく振られている尻尾が。

「ほら、食べ」

「いったただっきまゝす！」

怪盗は手袋を外して嬉しそうにラスクを頬張った。うん、なかなか美味いじゃん。と言いながらどんどん口に運んでいく。そのスピードに探偵は呆れつつも驚いたが、本当に腹減ってたんだなと微笑ましくも思った。

「つたりめーだ。蘭が作ったんだ。不味いはずがねえ」

「それはそれは、ゴチソウサマ」

「そうか。もういらないのか」

「まだ食う！」

探偵は一頻り笑った後、怪盗の姿を見てまた噴出した。口の周りも膝の上も砂糖とパン屑だらけだ。怪盗は何の事だかわからず小首を傾げていると、探偵がパックのコーヒー牛乳を差し出してきた。自分用にはブラックの缶コーヒーだ。

「そんなに頼張って、のど詰まらないか？」

怪盗は受け取ったコーヒー牛乳にストローを挿す。探偵も缶コーヒーのプルトップを開ける。

深夜のお茶会はもう少し続く。

ラスク（後書き）

かれこれ5話目です。

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

キッドのダメダメ具合に拍車が掛かってきて止められません。

でもまあ、この連載の目的である台詞を言わせることが出来たので
良しとします。

100725

金平糖

今日、探偵は阿笠博士の家へ泊まりに来ていた。ターボエンジン付きスケートボードの定期点検のついでに新作ゲームのテストプレイだ。比較的頭を使うパズルの組み込まれたアクションゲームで、アクション系のゲームが苦手な探偵でも楽しめた。かれこれ2時間近くもテレビ画面を見続けていたため、いささか眼精疲労気味だ。探偵は少し目を休めようと2階へ上がった。そして回廊の窓から本来の自宅である洋館を眺めると、屋根の上に白いものが居るのが目に付いた。

「なんか、いる」

探偵は踵を返して階下へ移動すると、キッチンで片付け物をしていた哀に声を掛けた。

「なあ、灰原。なんか甘いもんじゃないか？」

「どうしたの？」

「白い犬が居た」

白い犬？哀は一瞬何の事かと思ったが先日探偵の話思い出して、ああ、と頷く。そして戸棚を漁り、手の平より少し大きな袋を取り出した。

「貰い物なんだけど、これでいいかしら」

「いいのか？」

「博士の為にも是非貰って頂戴」

「サンキュ」

探偵は博士の家を出るとそのまま裏へ回った。そして博士作のシューズの力を借りて塀を飛び越える。着地点は工藤邸の裏口だ。そこからそつと自宅へ侵入すると、明かりを点けずに腕時計型ライトを点灯させ、家の中心部に存在する屋根裏部屋へと向かった。

「おつす、キッド」

探偵は屋根裏部屋の小さな窓の鎧戸を開け、窓枠に腰掛けた。さすがの探偵も、あの急斜面の屋根の上に出るのは躊躇する。怪盗は体を少し探偵の方へ向けて座りなおした。

「どうしたんだ？こんな夜更けに」

「それはこっちの台詞だ。なに黄昏てんだよ」

「そういう名探偵は何しに来たんだよ？」

「隣に居たら、うちの屋根に白い犬が居たから来てみた」

「犬って・・・」

「ほら、今日は金平糖持つて来たぞ」

「また、古風なものを」

「いいから食え。人間腹が減つてるとロクな事を考えないもんだ」

探偵が差し出した袋にはもみじのシールが貼っており、中身もそれに伴って赤やオレンジを中心にした配色の金平糖が入っていた。怪盗は今日一日まともな食事を取っていないことを思い出す。昨夜あたりからずつとイライラという、それどころではなかったのだ。

「これ、珍しい色だな。赤いのって初めて見た」

「ああ、俺もそう思った。普通金平糖って言ったら淡い色っていうイメージだもんな」

カリッ コリッ

二人は月を眺めながらゆっくりと金平糖を食べ始めた。さながら月見のようだ。

暫らくして、探偵は怪盗が赤い金平糖ばかりを選んで食べている事に気が付いた。

「なに選んで食ってんだよ」

「憎ったらしいんだよ、赤が」

「なんだそりゃ」

「なあ、名探偵」

「ん？」

「蘭ちゃんに、『嫌い』って言われた事あるか？」

「なんだよ、藪から棒に」

こいつは突然何を言い出すのだ、と怪盗を見ると、膝の上に顎を乗せ手の中の金平糖をコロコロと転がしている。口元は一生懸命笑っていたが、寂しそうな目をしていた。いつも自信たっぷりで、どんな危機的状況でも楽しんでいるように見えるのに、この男も幼馴染が絡むとダメなのか。探偵は自分と似た境遇を持つこの男に親しみを感じていた。

「まあ、無くはないな」

「俺さあ、いっつも言われるんだよ。『怪盗キッドなんか、大っ嫌い』って」

「……」

「いつもなら笑って流せるのに、今日に限っていろいろ頭ん中ごちやごちやしてて余裕なくってさ。崩れちまったんだよなあ、ポーカ―フェイス……。その後すっげー心配されちまってよ。ホント、何やってんだか」

「ほう、好きな子にフラれて、思わず涙を流したら心配かけて、それで頂垂れてたと」

「べ、別に好きとかそんなんじゃ……。つつつか変な脚色すんなよ」

怪盗は手の中の金平糖を口に放り込んだ。カリツと音がする。

「お前、もう満足しちゃったのか？」

「え？」

「自己満足だつて言ってたじゃねーか、石を見つけ出すの」

「あ……。いや、まだだ。けど……。」

怪盗の言葉が尻すばみに消えていく。それと同時に目の光も失われていった。

「お前の所為じゃないさ」

探偵は至極当然というように言った。

「世の中に名のある宝石がいくつあると思ってる。表に出て無い物まで含めたらいくつあるか分かったもんじゃねーぞ？それを一つ一つ確かめて、あまつさえ、俺たち探偵や警察じゃない『誰か』まで誘い出そうとして。お前、相当忙しいな」

バレてねーとも思ってたのか？と探偵は挑戦的に笑う。怪盗は小さく息を飲み目を見張った。

「壊すって決めたんだろ？やって見せろよ。俺、結構好きだぜ？お前と追いかけてこすんの」

怪盗は再び顔を伏せると口元だけをニヤリとさせる。そして金平糖の袋を漁り、中から大きめの赤い粒を取り出すと月に翳した。

「ちくしょー、見てろよ！お前なんて、こうだ！」

そして言い終わるやいなや、ガリツと金平糖を噛み砕く。

「お、調子戻ってきたな」

「ああ。誰かさんのラブコールのお陰で、悩んでるヒマがなくなっ
た」

ああ、怪盗の顔だ。やはりこういう顔をしていて貰わなくては、
こちらでも張り合いが無い。

「ところで名探偵。もしかして俺って餌付けされてた？」
「結果的にな。俺もさっき気が付いた」

探偵と怪盗は顔を見合わせて笑った。

お前気付くの遅くねえ？仮にも探偵だろ？
俺にたかったヤツが何を言う。

「餌付けされてたってことはさ、懷いて欲しいって事？」
「いや、お前、既に懷いてるだろ」

「言われてみれば、そんな気もする……。ダメじゃん、俺」

ダメなのか？ダメだろ。別によくね？普通よくねーな。不都合あ

ったか？探偵と怪盗だぜ？俺が普通か？うーむ。お前も。・・・普通じゃないかも。ならいいだろ。いいのか。いいんだよ。

怪盗は上手く丸め込まれてしまったが、それもいいかな、とも思う。とにかく今日一日、いろいろと悩み過ぎて疲れた。たまには素直に認める事も大切だ。

金平糖（後書き）

二週間ぶりです。今回はちょっとかかりましたが、短いです。
悩ませるのは難しいですね。

考えすぎて私の胃が痛くなりました。（笑）

さて、次回は最終回。

下書きはできているので、そんなにお待たせはしないと思います。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。 100808

エピソード

快斗は学校の帰りに、米花デパートへ寄り道していた。

目指すは最上階催事場。今日から数日の予定で北海道物産展が開催されている。そして目的は薄荷飴。先日探偵から貰ったその味が忘れられず、ネットで検索したら意外とあっさりヒットして実は既に注文済みなのだが、今朝の新聞の折込チラシに同じものが近くで販売されると知り、すぐに欲しくなって探偵のテリトリーにまで足を運んで来てしまったのだが・・・。

「失敗した・・・・・・・・」

快斗はうつかりしていた。薄荷飴の事ばかりに気を取られていて北海道の名産品のことをすっかり失念していたのだ。

北海道の銘菓といえば、白い。人。六。亭。マ。セイ。イズ。名産といえば、ジャガイモ、たまねぎ、とうもろこし、乳製品、ギョ介類。特に秋になると川を上って産卵するというアレ。そう、アレの姿が異様に多い。上りのエスカレーターを降りて真っ先に目に入ったのが、アレの絵が描かれた大漁旗。目の前には貝類・海藻類・甲殻類・ギョ類。

見るな！俺！

とは言っても見渡す限り海産物。この先に上りのエスカレーターは無く、下りのエスカレーターは反対側。エレベーターはデンジャーゾーンの向こう側。いったいどうしろと・・・。

快斗はエスカレーターの終点にしかない柵にもたれ掛り、下りのエスカレーターを眺めていた。

「飛び降りちまおっかな」

快斗の運動神経を持つてすれば、こんなもの高いうちに入らないし、着地点が移動していたところで躊躇するものではない。ただ、ここでヤケを起こして飛び降りようものなら、客も販売員達も大騒ぎすること請け合いである。さすがにアレが襲ってくるわけではないのだし、と飛び降りることは断念した。勿論アレが襲ってくる（何かのはずみで飛んできたりとか）ような事があれば、形振り構わず逃走するが。

顔を上げて正面を見れば銘菓のコーナー。快斗は意を決してエスカレーター脇の通路を通り抜けることにした。

「はあ。死ぬかと思った」

息を止めて、必死の思いで下りエスカレーター前までやってきた。途中アレを乗せた台車が目の前を横切ったが、とりあえず事無きを得ることができた。快斗は一息つくと改めて銘菓コーナーを見渡した。そして目的の品物を見つけ、脇目も振らず直行する。もうアレを目の端にでも止めてはならない。これ以上見たら絶対死ぬ。間違はなく死ぬ。幸いこの先には階段がある。帰りは階段で決定だ。快斗は少々強張った顔つきで薄荷飴の袋を二つ掴み販売員に突き出した。

「これください」

そしてビニール袋に入った薄荷飴と引き換えに代金を支払ったその時だった。

「あっはっはっはっ。あーはっはっはっはっ」

笑い声というか、大爆笑が聞こえた。

どこかで聞いたことがあるような声に発生源へ顔を向けると、名探偵が俺を指差し腹を抱えて笑っていた。

って、俺？何で俺！

快斗は焦った。黒羽快斗としてはまだ会ったことが無かったし、何よりバレていない・・・ハズ。

「かいっ、ぷっぷっぷっぷっ。快斗兄ちゃん、くっくっ。僕があげた飴、そんなに気に入ってたの？あっはっはっはっ」

バレてたのね。

何がどこまでバレているのか多少気になったが、何より面が割れてしまっているのだ。他の情報だってこの探偵にかければ時間の問題だろう。とりあえず今は、怪盗キッドと黒羽快斗を区別してくれた事を喜ぶべきかもしれない。

快斗はいつまでも笑い続けているコナンに一つ溜息を落として言った。

「コナン。この後の予定は？もしよかったら俺とコーヒーでも飲みに行かない？」

コナンはキョトンとしたが、泥棒も裸足で逃げ出しそうな笑みを一瞬だけ浮かべ、すぐに子どもらしい顔付きで言った。

「うん、いいよ。蘭姉ちゃんに頼まれてるこの飴買った後、快斗兄ちゃんの奢りでね」

「もちろん」

快斗は買物を買ませたコナンがエスカレーターへ向かうのを、
そっちは危ないから、と階段へ誘導した。どこが危ないんだよ、と
いう尤もな疑問を適当にいなして階段を下りる。この後問い詰めら
れて、また大爆笑されることだろう。それから何を話そうか。快斗
はだんだん楽しくなってきた。そして調子に乗って階段の半ばから
踊り場へ飛び降り、綺麗に着地を決める。

振り返るとコナンが、ホントに子どもだよな、と呟いていた。

エピソード（後書き）

何一つバレていないと思っている怪盗と、
正体は知ってるけど目的までは知らない探偵のお話で
ラストは超お約束になってしまいました。

どうでしたでしょうか。

少しは楽しんで頂けましたでしょうか？

是非、ご感想くださいね。

私は書いてとても楽しかったです。

皆様、最後までお付き合い下さいましてありがとうございます。
それではまた、次の機会に。 100808

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4231m/>

おやつシリーズ

2010年10月9日01時53分発行